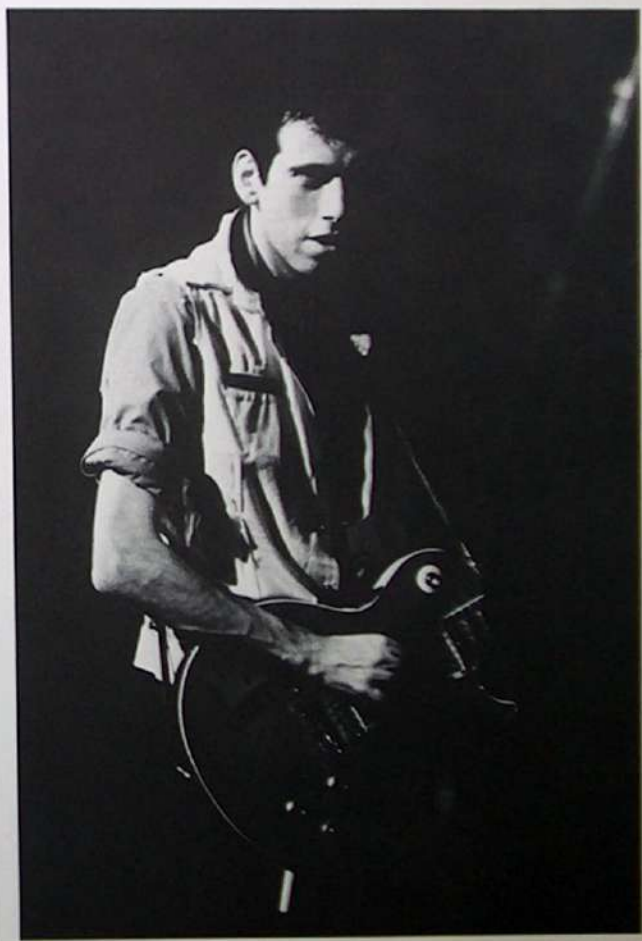
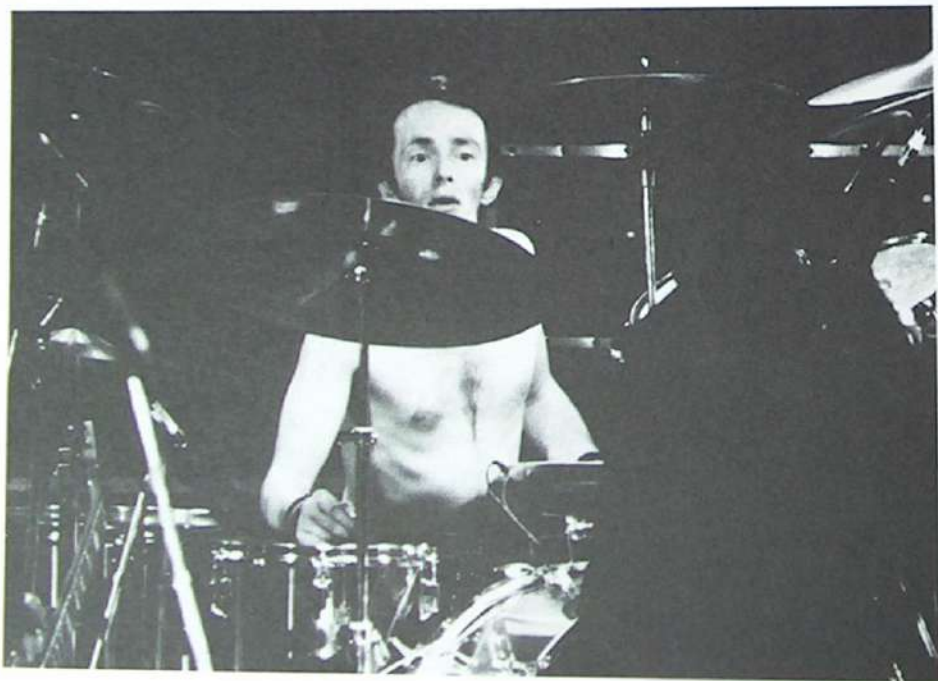


THE CLASH

THE CLASH









セックス・ピストルズやストラングラーズが活動を開始したのが、1976年の初頭のことだったから、パンク・ロック、ニュー・ウェイヴと呼ばれる動きがスタートしてから、ちょうど満6年を経たことになる。このわずか6年のあいだにロック界に起こった変動は、実に激しいものだった。

ピストルズが典型的に表わしているように、パンク〜ニュー・ウェイヴは、端的に言って、ロックの原点に還ろうとする運動だった。それまでの既成のロックが、ジャズの要素やクラシックの要素やポップスの要素を取り入れて、音楽技術的には高度かもしれないがロックとしての肉体的なパワーに欠けた、ものわりのいい音楽になってしまっていたのに対し、そうした先輩たちを批判——いや、むしろ否定して、若者の怒りや焦燥をなまなくぶっつけ、ロック本来の衝動をバネとしたパワフルな音楽を取りもどそうとしたのがピストルズたちだった。

ちょうどイギリスの社会情勢が、そのようなロック衝動の爆発を必然的なものにした。経済の落ち込みはひどくなるばかりで、失業がふえ、とくに若者の失業率は高く、失業手当で食いつなぎながら巷をぶらついている若者たちの欲求不満を、ピストルズはそのまま音楽に表現したと言えそうなくらいだった。もうひとつ社会情勢で見逃せないのが、イギリスに黒人——ことにジャマイカなどカリブ海から流れ込んできた黒人たちが急増したことだ。彼らはまたもっとも失業率が高く、イギリスの社会不安を激化するとともに、あいつらが流れ込んできたからイギリスが悪くなったんだ、と白人下層階級の反感と憎悪の恰好の標的となり、人種対立が社会不安の新たな要素となった。

前置きが長くなったが、ミック・ジョーンズやポール・シムノンが、ロンドンSSというグループを作って音楽活動を始めたのは、そのような社会の動き、音楽の動きの中でだった。ピストルズやストラングラーズの結成と入れ替わりにロンドンSSは行き詰まり、解散するが、それに代わってクラッシュが誕生し、パンク〜ニュー・ウェイヴの中で重要な存在となってゆく。クラッシュがどのようなグループであり、ロック界の中でいかなる位置を占めているか、を把握するには、セックス・ピストルズと比較してみるのがいちばんの早道ではないかとほくは思う。つまり、ピストルズは、さきほど言ったロックの本質的な衝動をもっとも純粋に持っていたグループだ。だからこそロック界を大きく変える起動

力となり得たわけだが、同時にまた、急速に自滅してしまわざるをえなかった。1970年代後半は、ロックにとって、本質的衝動を取りもどすことが必要な時代であったとともに、しかしまた本質的衝動だけでは成り立たない時代でもあった、ということだ。そのような、ロックに課せられた矛盾は、イギリス社会そのものの根底に横たわっていた矛盾だったのかもしれない。

そんな難しい条件の中で、多くのパンク〜ニュー・ウェイヴのミュージシャンが、いったんはロックの本質に回帰したものの、いつの間にか彼らが否定したはずの既成のロックと同様のものわりのいい音楽になってしまっていた。ピストルズのように本質を貫こうとするのはもっとも困難な道だったが、ストラングラーズなどはかなりヨクヨクしながらもその道を貫いてきている。サウンドを前衛化しながら従来のなまなまにどんとノメリ込んでゆくグループも多い。ジャパンもそうだと見えるし、最近わが国でも意外なほどレコードが売れたというパウハウスなんかはその一例だろう。

そうした中で、ぼくがとて興味をひかれるのが、ポリスとそしてクラッシュであり、アメリカではトーキング・ヘッズである。

さきほど触れたように、イギリスの社会問題を複雑にしている要素のひとつに、カリブから来た黒人たちの問題がある。白人下層階級とこれら黒人たちは、互いに職を奪いあう競争相手としてとくく憎しみあうようになりがちだが、本来なら同じ立場にあるものとして手を結ばなければならない。そうした共感の上に立って、音楽的に連帯する——つまり端的にはレゲエやダブのサウンドを取り入れるのが、パンク〜ニュー・ウェイヴの中のひとつの動きになっており、ポリスとクラッシュはその方向で音楽的に最大の成果を収めた。アメリカではトーキング・ヘッズが別のやり方でブラック・サウンドを取り入れている。これは、ロックの本質的衝動を捨ててコマーシャルズムと妥協するのではなく、かと言って衝動だけに頼って玉砕するのではなく、パンク〜ニュー・ウェイヴが目ざした方向をさらに黒人との連帯の方向へと拡げて音楽的にも厚みを増すという、いちばん理想的な道への歩みであり、クラッシュのあの『サンディニスタ』はそういった道から生まれた最大の成果なのではないだろうか。

70年代ロック・シーン最大の衝撃と言え1976年ごろからイギリスで台頭したパンク・ロック・ムーブメントを置いてほかにない。1969年のウッドストックを最後にカウンター・カルチャーとしてのロックは死滅してからすでに7年が経過しようとしていた。まったく無気力に眠りほけているロック・シーンを揺り動かすような状況が発生したのは実にこの時であった。

構造不況に悩むロンドン。明日への希望も持てない若者たちにとって、フラストレーションをぶつけて自分の存在を確認するためには、楽器を手にして自分の胸に湧きあがってくるメッセージをたたきつける以外に方法はなかった。初期のパンクがせっかちなリズムに乗って聴きとりにくい歌詩をわめき散らしていたとしても、いったい誰が責められよう。むしろそれは不気味な存在感となってじわじわと大人たちの首をしめつけるまでに膨張していた。

その中でも76年11月に世に送り出されたセックス・ピストルズの「アナキー・イン・ザ・UK」、翌77年3月に眠りこける全世界へ向けて発射されたクラッシュのミサイル「白い暴動」はロック・シーンにおける新しい時代の夜明けを告げていた。それから5年、パンク・ロック・ムーブメントはあまりにも急いで世界中を駆け抜けてしまったようだ。クラッシュやピストルズに刺激されて雨後のタケノコのように次々と出現したパンク・グループ、そのほとんどは安全ピンとツバを吐き散らすだけのファッション・パンクだったけど、そいつらは花も咲かせずに散り急いでしまった。オールド・ファッションのロック・グループのメンバーは「だから言ったじゃないか。パンクは一過性のもんだって」とさも嬉しそうに胸を張った。事実セックス・ピストルズにしたところで78年1月、アメリカのデビュー・ツアーの途中で解散してしまう。燃えさかったパンクの炎は消えたかに見えた。しかし、しぶとく生き残った、それこそ本物のロッカーたちがいた。クラッシュである。

この4人のしたたかな若者たちは、パンクがその出発点において堅持していたスピード感と、世の中のすべての不条理に対して一步もゆずらずに闘うという若者らしい潔癖さを少しも失わず、しかもスピード感だけで満足して時代の進歩について行けず、すぐに古めかしくなって存在価値を失ってしまった他の凡百のバンドとはさすがに違って、いちはやくレゲエやファンキー・ミュージック、それにサイケデリックなサウン

ドを採り入れて自分の音楽世界をアルバム毎に拡大して行った。そこがクラッシュのすごい所だ。しかもチンピラ然とした、鋭角的な姿勢を少しも失っていない。それはひたむきにロックン・ロールしながら、グループとしての音楽を時代感覚を失わずに拡大して行ったストーンズに通じるものがある。そう言えばストーンズのあの一種異様なまがまがしさを、ちょっとばかり若々しく清潔にしたらクラッシュに似てくるのではなかろうか。

いち早くアメリカでも成功したビートルズと違って、ストーンズのアメリカ制覇までの道はいばらの道だった。クラッシュもそうだった。実りないアメリカ攻撃を何度となく繰り返している。彼等の時代に対する、聴衆に対するアプローチ、メッセージがすぐに正しく聴衆に伝わっているほどクラッシュの4人は楽観主義者ではないはずだ。でも叫ばなければならない。その苦悩と不屈の決意は、デビュー・アルバムの『白い暴動』以来『動乱』、『ロンドン・コーリング』、『サンディニスタノ』と続くクラッシュの4枚のアルバムに深く刻みつけられている。

これだけ自分に対してそして世界的情況に対して誠実なグループを僕はまだ見たことがない。何という生真面目な奴等なのだろう。

パンクは死んだ、と誰もが言う。たしかにファッション・パンクは死んだ。しかしクラッシュは不死鳥だ。時代の差分を吸い取りながら翼をいよいよ強靱なものにし、嵐の海を飛び続けている。だからこそ今、この時代にこそクラッシュが必要なのだ。

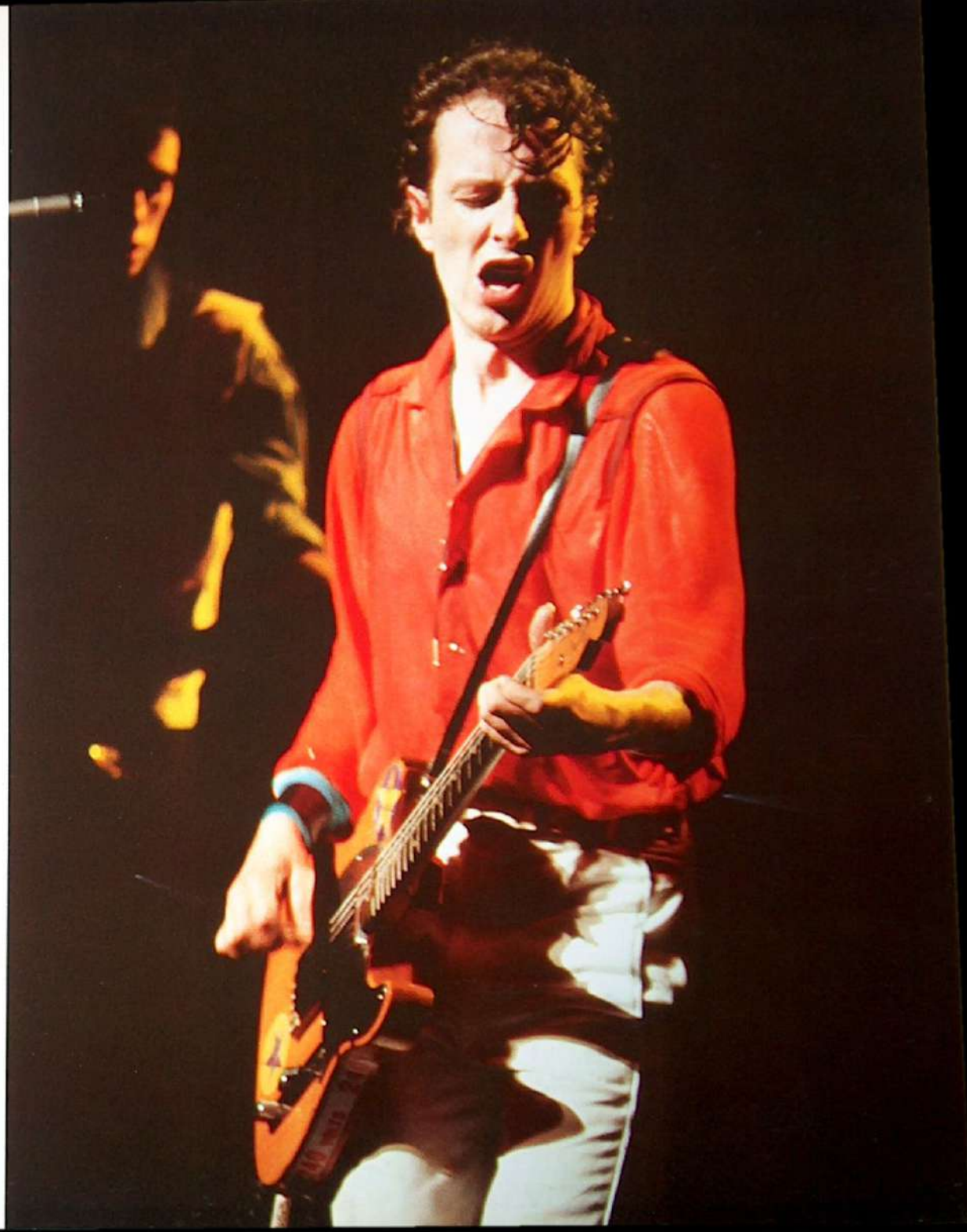
80年代はブラックの時代になるだろうと言われていた。

アメリカ、中米、南米、アフリカの黒人の音楽には燃熱期に入った白人の音楽にはない原始的エネルギーに満ちあふれている。これに白人の音楽が対抗するのは至難のわざだ。今ブラック・パワーと対等に渡りあえるのは、ただひとつ、クラッシュの音楽あるだけだ。

思えばクラッシュにも長い道程だった。終りない旅を決意して戦いながら一步と頂上めざして瓦礫の山を登りつつある。だからこそ、今、われわれにはクラッシュが必要なのだ。目をしっかりと開いてクラッシュと対決しそのエネルギーに負けないだけの肉体と精神の強さが必要であることを思い知った時、そこからだれもが明日への新しい第一歩を踏み出すことができるだろう。だからこそ、今、クラッシュが自分を写す鏡として必要なのだ。82年の初頭に当たっての今こそ。

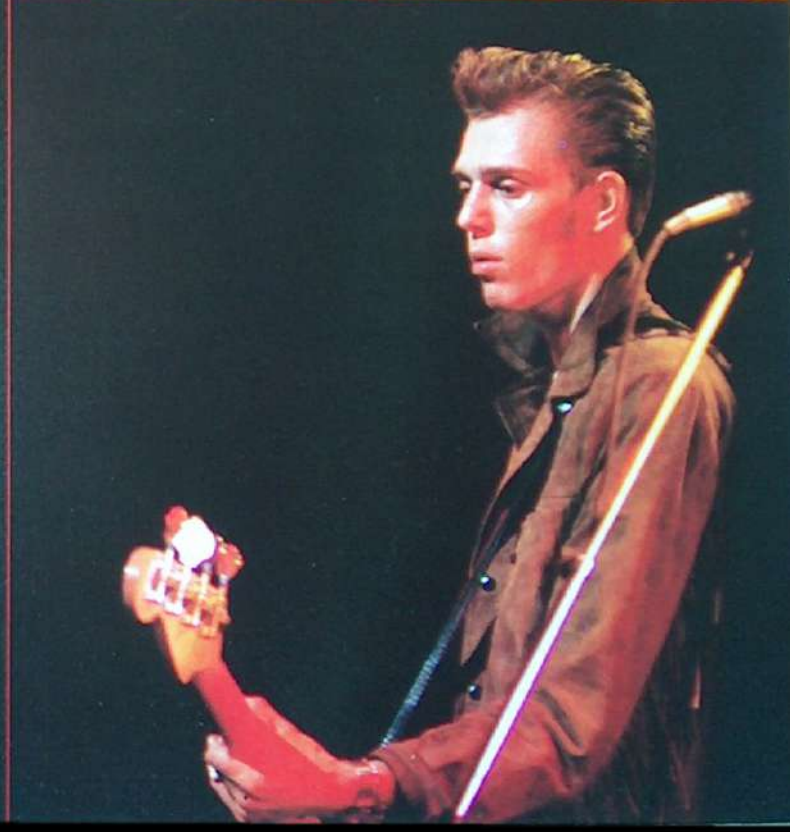
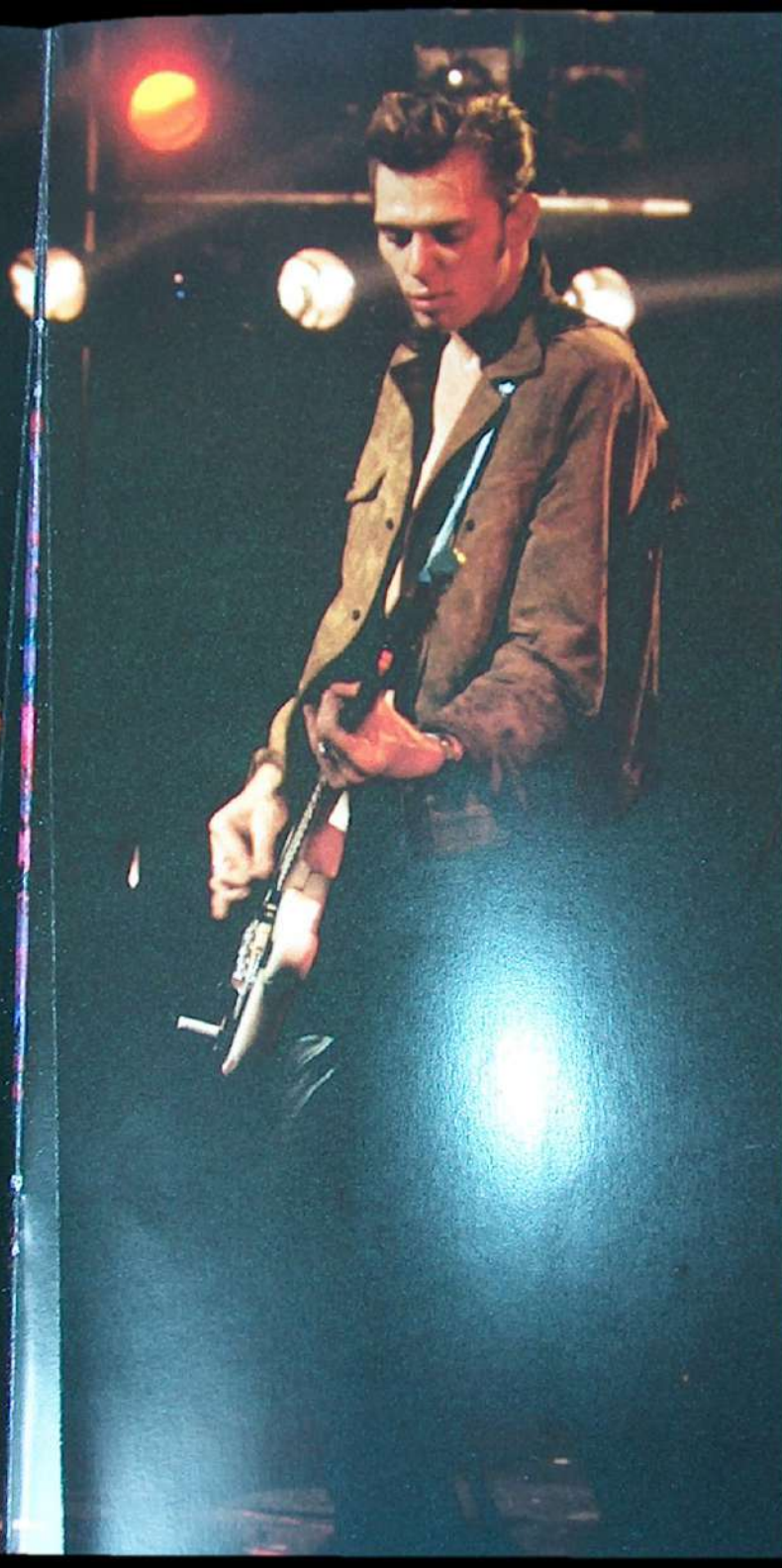






THE CLASH





BRIDGESTONE Sound Mate

82年度ブリヂストン・サウンドメイト

会員募集中!!

ブリヂストン・サウンドメイトは、ドライビングのスピード感とロックの爽快感をテーマに生まれた、ニューライフの会員システムで数々の催し物、ホットなニュース、あなたもサウンドメイトのメンバーになってみませんか。きっと新しい何かが始まりそう。

◆特典がいっぱい

- メンバーになると、こんなに得する特典がいっぱい。
- ★コンサートのリザーブ・シートを優先的に販売
ウード音楽事務所が主催する武道館クラスのコンサートに限り、会員の方に優先的によいお席のチケットを販売いたします。席の予約、販売方法は、コンサートの事前に各メンバーの方に連絡いたします。
- ★サウンドメイト・ペイパーを配布
年6回、隔月でサウンドメイト新聞をお届けします。来日ミュージシャンの裏話や素顔、Nowな音楽情報、コンサート情報など、ウード音楽ならではの楽しい記事がズラリと充実した紙面でお届けします。
- ★サウンドメイト・コンサートに御招待
サウンドメイトでは、ふだんあまりコンサートのチャンスに恵まれない地方の方も含めて会員の交流をはかるため、年1回サウンドメイト・コンサートを開催します。
- ★スペシャル・ジャケットをプレゼント
サウンドメイトでチケットの予約をなさった方に限りですが、会員証のスタンプがこちらの規定数に達しますと、年末にすばらしい特製ジャケットをプレゼントいたします。

◆入会方法は、カンタン!!

サウンドメイトへ入会ご希望の方は、住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上、年会費1,500円を同封し、必ず現金書留でお申し込み下さい。会員の有効期限は82年12月31日まで、募集数は10,000名。尚、年齢、職業など制限はございません。宛て先：東京都港区南青山3-8-37 第2宮忠ビル ウード音楽事務所 ブリヂストン・サウンドメイト事務局(〒107) 折り返し、会員証をお送りします。



5 DE A... A las SEIS de la tarde

... SANTIAGO MARTIN EL VITI DAMASO GONZA

... AMI MARTINEZ DE UBEDA

... ANO

このラジアルは、走りだけでは語りつくせない。



REGNO



目的地に着け

レダグ。行動の美学。

走ってきた。その距離の半分だけ、心は満たされて、快い緊張の記憶がいまも残っている。たとえは
レダグの走り、シャープなテラリング空気が、瞬の美しい身のこなしを生じ、グリッド世界の驚くべき
高さが、行動に余力を与えてくれる。この高運動性能の秘密は、マイヤインサートにある。ヒートマップの
剛性が無制限に向上したおかげで、ワンランク上のフットワークが楽しめるのだ。では居住性はどうか
か、ロングラスタンスを走ってみると、その乗り心地の良さがわかる。フワフワと揺るような甘さがない
なんど、うんやりとした感触だ。これが、アラミド・ファイバーと、セルトの持ち寄り乗り心地なのだ
合点がいく。レダグ。運動性能と居住性を、ここまで高い次元で結晶させたラジアンが、あつたらうか

目的地に着けばいいという走り方は、僕はしない。

STONE



A las SEIS de la tarde

DAMASO
CONZA
OSTO

AMI
MARTINEZ
DE UBEDA

ANO

PLAZA DE TOROS

NUEVA ANTONIA
Empresa A. Ojeda
Domingo, 2 de Mayo

Gran Corrida de
6 Novillos
para toros

Excmo. Sr.
Conde

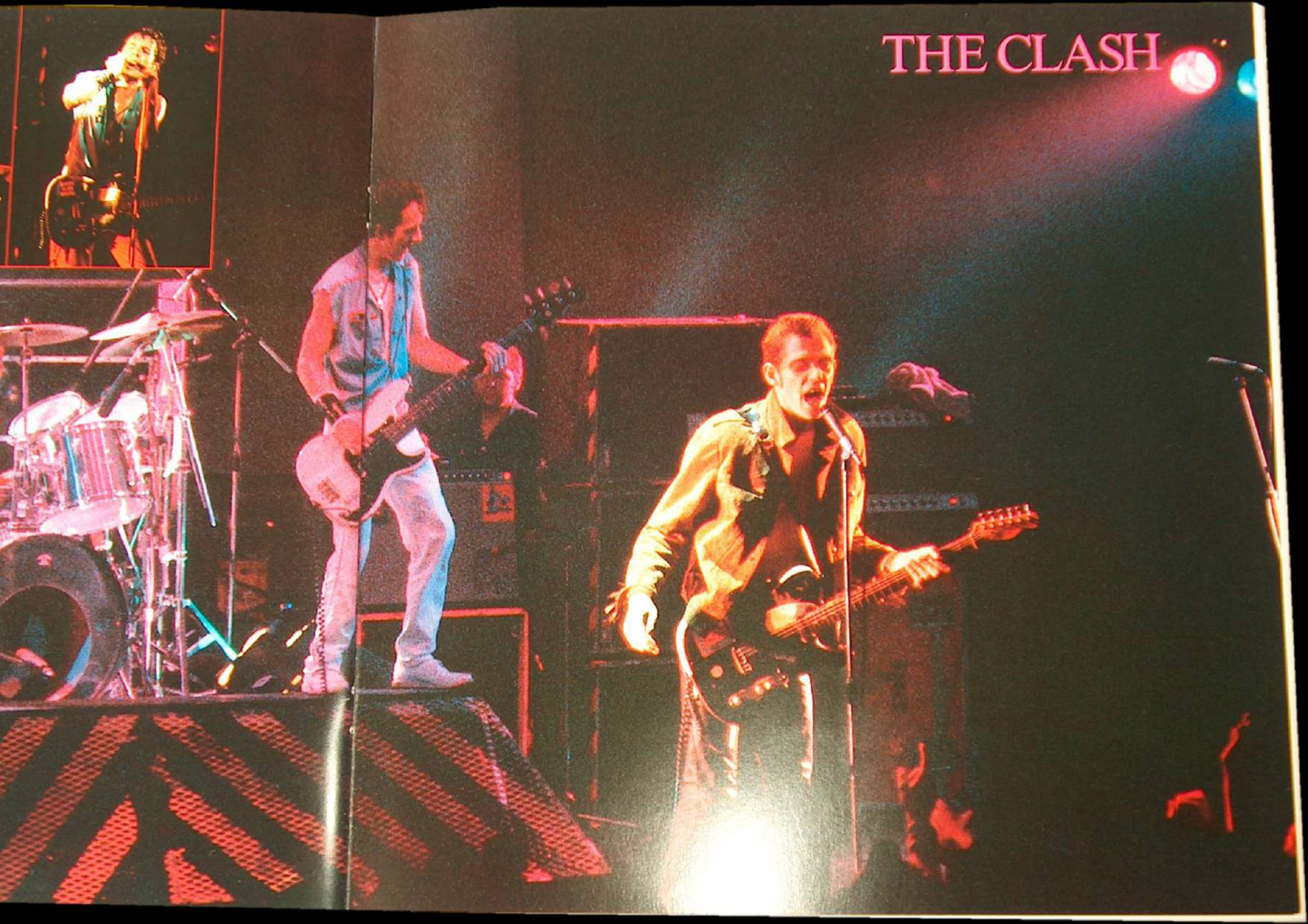
D. A. NAD
MORENO
DO

D. A. NAD
MORENO
DO

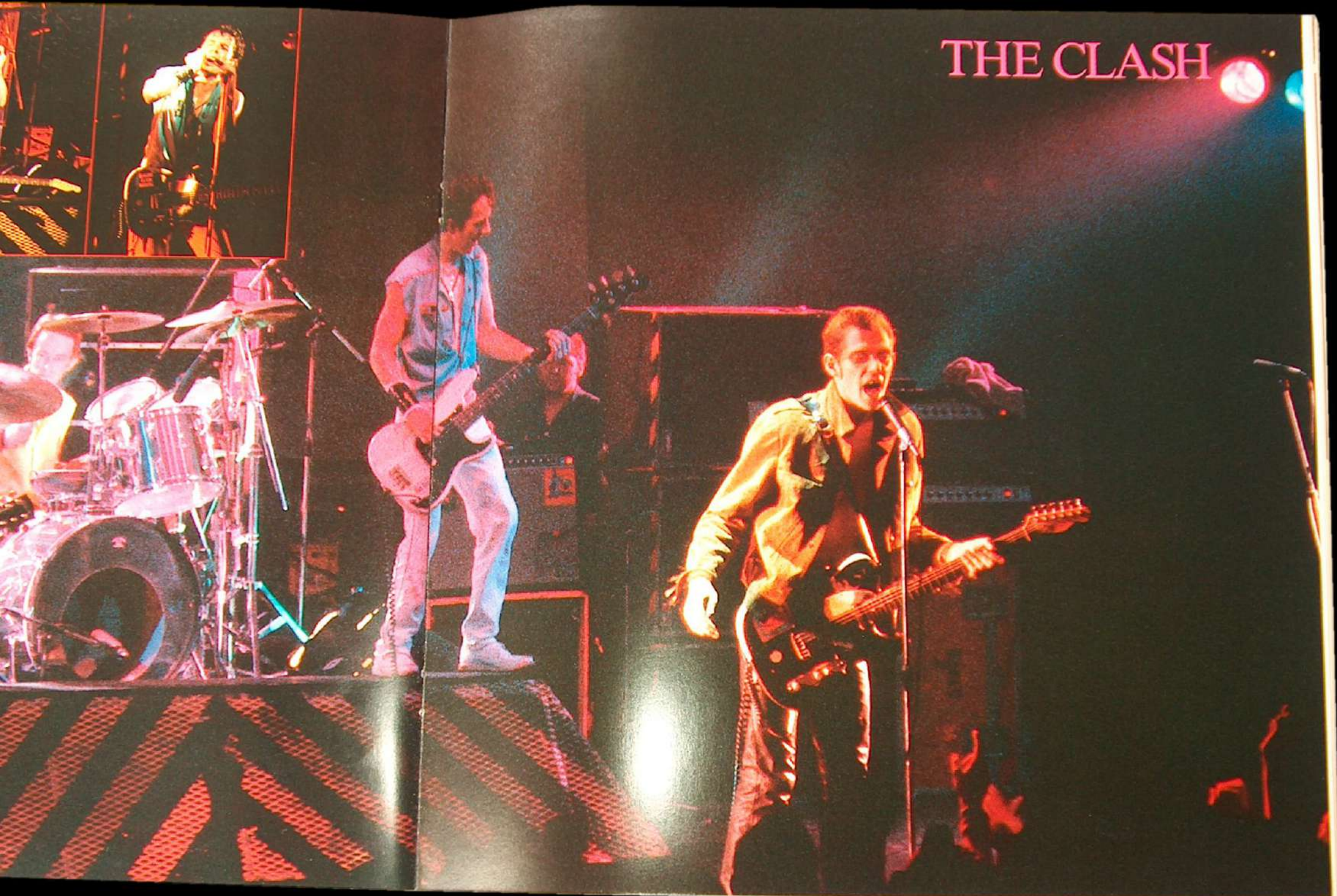
EN NUEVA ANTONIA
Adquiera su Pa
Villa o Aparam



THE CLASH



THE CLASH





曖昧さを切り裂いてクラッシュ

「僕は卑屈に振る舞う僕の信条だ。たとえ限界を知る、それが人よ。しかしやってみよう。僕は何度も何度も今世の中、率直で暮らすのようにはたかひたり、人生を語りたいのだ。

デートの話も、カルフォルニア、フっても、音楽の社会に何が出たか。率直であつたり、ジョンを明確にするさかない。どんないかなければならそんな事をする。なんとなく曖昧みんな斜に構えてモダゼ。なんて死んでしまえばクラッシュに率直さをあげつ

「サンディニス馬鹿正直なシれ果ててしまつていつも汚い」
 「ああ、時々ね、ういうことに僕なんかか歯がゆいものさえ思える。」

岩谷 隆一 (ロッキンマン・キーン)
 YOICHI SHIBUYA

AUTO
ELECTRICAL
RAGE



曖昧さを切り裂いてクラッシュ

「僕は卑屈に振る舞う人間は問題にしない。月に手をのばせというのが僕の信条だ、たとえ届かなくてもね。その方がよほどました。」「自らの限界を知る、それが人間であることのしるしであるってことになってるよね。しかしやってみなくちゃ何が自分の限界なのかわかりっこないだろう。僕は何度も何度も泥沼にはまり込んだことがあるが、しかし……」

今の世の中、率直であったり大真面目であったりするの、とても野暮な事のように思われている。軽いのがいいのだ。大上段に社会改革を語ったり、人生を語ったりすると、正気を疑われたりする。軽いのがいいのだ。

デートの話も、軽く音楽の話しなんかの方がいい。しかも、気分はカルフォルニア、フュージョン、AORで決めなくてはならない。間違っても、音楽の社会的有効性とか、「サンディニスタ」はニカラグア革命に対し何が起きたか、なんて話をしてはいけない。

率直であったり、大真面目であったりするという事は、自らのポジションを明確にする事である。自分の立場を明確にすると、もう言い訳がきかない。どんな批評に対しても、そのポジションを背景にして答えていかなければならない。それは非常にシンドイ事で、何も好きこのんでそんな事をする奴は居ない。

なんとなく曖昧に、軽く、フラフラとしていた方が楽でいい。そこでみんな斜に構えて「まあ、いいじゃない。」「そうやって気負うのはイモだぜ。」なんて言って暮しているうちに、流れ弾に当たって死んでしまう。死んでしまえばいいんだ、そんな奴は。

クラッシュに対する、イギリスやアメリカのプレスの批判は、彼等の率直さをあげつらったものが実に多い。言葉足らずの政治的発言を笑い、「サンディニスタ」なんてタイトルを付けた彼等の気負いをちやかす。

馬鹿正直なジョー・ストラマーはそうした批判に直対応して、また疲れ果ててしまう。

——いつも浮世の苦勞を一身に引き受けてるなんて思わない？
「ああ、時々ね、僕はいいカモなんだよ。しかし自分で決めたことだ。そういうことに興味があるんだね、きっと。」

僕なんかから見ると、ジョー・ストラマーの大真面目さは、時として歯がゆいものとして映る。自ら進んで、批判のタネをまいているようにさえ思える。

バンクの英雄として登場したクラッシュはその反社会的、反抗的イメージを拡大再生産していけば、80年代のストーンズ的な位置を獲得できたかもしれない。しかし彼等はそうしなかった。常に自分自身に批判を向け、変わろうと努力し、そして変わっていった。それも、ひどくごちなく。アルバム一枚ごとに前作のイメージを否定し、リスクの大きい方へと自分達を追い込んでいった。

ミドル・クラス出身の、しかも大卒のインテリがバンクを演る、それを常に対象化し、新たな方向性を見いだそうとしている。

「僕らは一種のベトナムに住んでいるんだと思うよ。ベトナムほどハッキリ目には見えないが、同じぐらい苛酷なものだと思う。」戦争は今、ここに存在していると云ってるんだ。例えば社会福祉手当とかいっても、カウンターの後にすわった男達はおばさんなんかに来週の終りまであれもダメこれもダメなんて言ってるわけじゃない。もう万策つくまで、崩れてしまう人間がいるわけでしょ。そういう連中にとっては、戦争はここに存在してるんだ。」

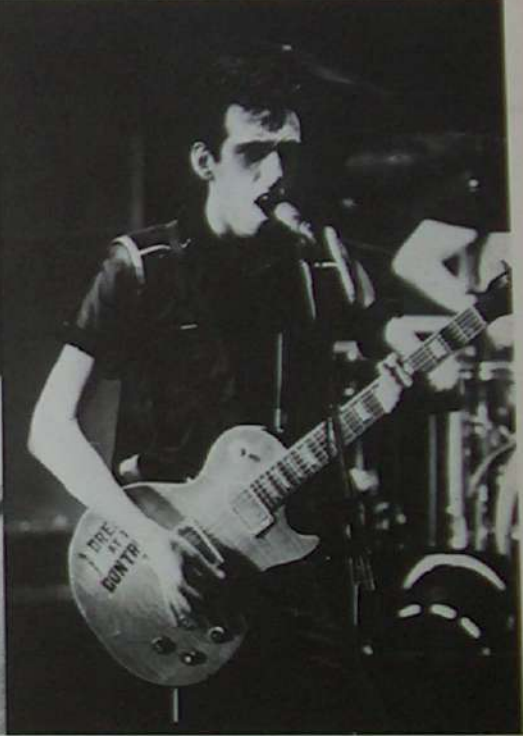
「戦争はここに存在している？ 冗談じゃないよ、まったく流行らないよ、そういうの。そう思うんなら、自分で勝手に戦争でもやりに行きゃいいじゃないか。」

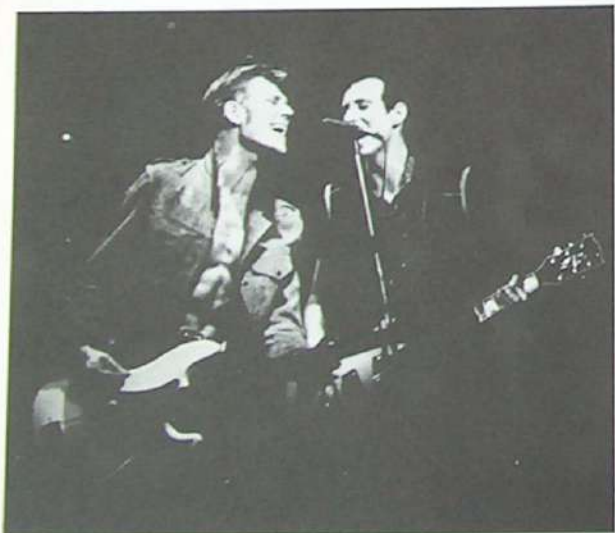
現在の日本では、そうした反応の方がごくごくノーマルなものだろう。正直言って、僕にも、そうした反応のひとつひとつに対応していく元気はない。日常会話の中で、相手がそうしたコメントを吐けば、きっと僕は「まあね、人それぞれだから、いいじゃない。」程度の事しか言わないだろう。ただひとつも儲からない雑誌を10年もやり続けて、ようやく軌道に乗った段階で思うのは、絶対にヘヴィーな局面において、最終的に自分を支えるのは、ひどく生真面目で率直な、気負いに似た確信であるという事だ。僕を支えてきたのはその気負いである。それはそれでいいと思っている。大変おこがましいかもしれないが、そうしたレヴェルでは、ストラマーを他人とは思えないのである。

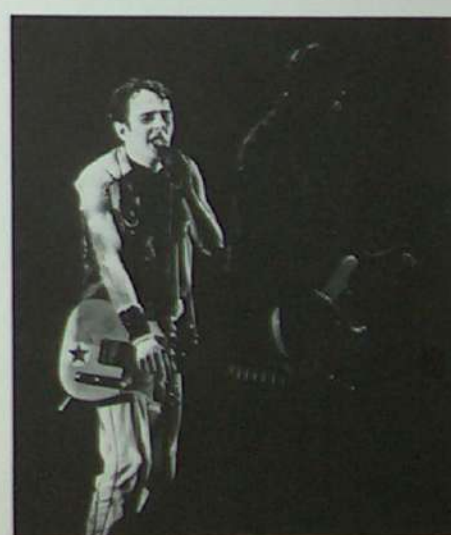
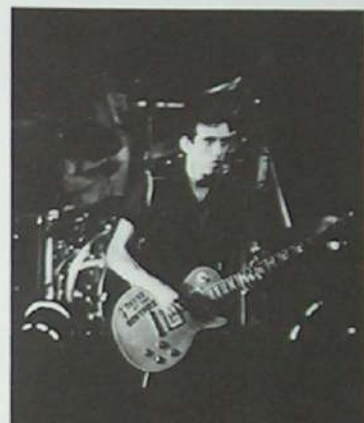
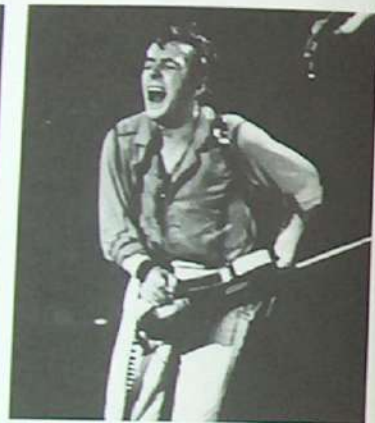
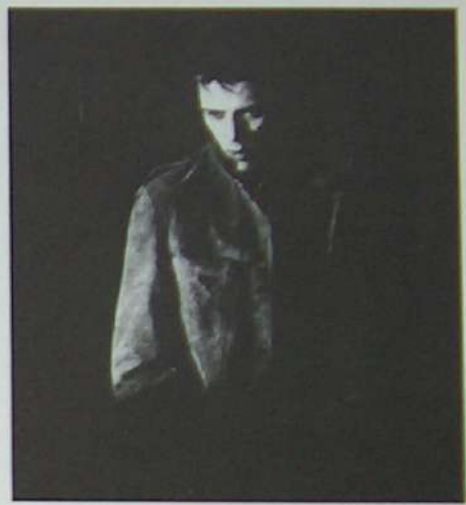
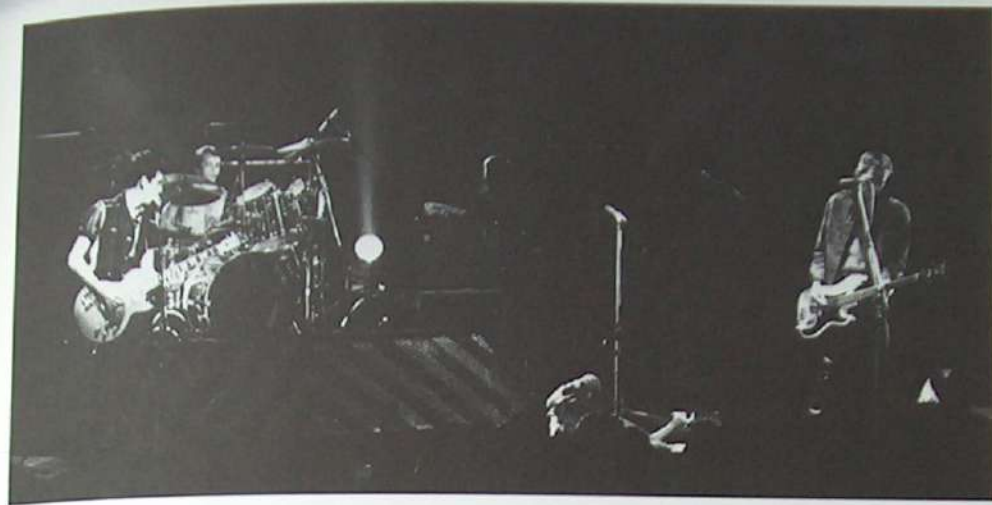
「僕は歌うためにここに居るんだ。自分が何をすべきかをわきまえ、それをやっている。僕のやることはエルサルバドルのジャングルで死ぬことではない。」

(本文中のジョー・ストラマーの発言はロッキング・オン81年の4月号、9月号に掲載されたインタビューから引用しました。)









プリテンダ

噂の女、クリッシー・ハインドが愛しのキッズに捧



■東京公演

2月26日(金) 渋谷公会堂 6:30pm

2月27日(土) サンブラザホール 6:30pm

2月28日(日) サンブラザホール 6:30pm

S ¥3,800、A ¥3,000、B ¥2,500
お問い合わせ TEL 03(402)7281

■京都公演

3月2日(火) 京都勤労会館 6:30pm

お問い合わせ TEL 075(211)0261

■名古屋公演

3月4日(木) 名古屋市公会堂 6:30pm

S ¥3,900、A ¥3,000、B ¥2,500
お問い合わせ TEL 052(241)8111

■大阪公演

3月6日(土) フェスティバルホール 6:30pm

S ¥3,900、A ¥3,000、B ¥2,500
お問い合わせ TEL 06(341)4506

プリテンダーズ

噂の女、クリッシー・ハインドが愛しのキップに捧ぐ熱きロックン・ロール!!



■東京公演

2月26日(金) 渋谷公会堂 6:30pm

2月27日(土) サンプラザホール 6:30pm

2月28日(日) サンプラザホール 6:30pm

SY3,800、AY3,000、BY2,500
お問い合わせ TEL 03(402)7281

■京都公演

3月2日(火) 京都勤労会館 6:30pm

お問い合わせ TEL 075(211)0261

■名古屋公演

3月4日(木) 名古屋市公会堂 6:30pm

SY3,900、AY3,000、BY2,500
お問い合わせ TEL 052(241)8111

■大阪公演

3月6日(土) フェスティバルホール 6:30pm

SY3,900、AY3,000、BY2,500
お問い合わせ TEL 06(341)4506

ウルトラヴォックス

待望の初上陸。今、日本にヨーロッパ・ロマンスが熱く漂う!!



■名古屋公演

2月21日(日) 愛知厚生年金会館 6:30pm

SY3,900、AY3,000、BY2,500
お問い合わせ TEL 052(241)8111

■大阪公演

2月22日(月) フェスティバルホール 6:30pm

SY3,900、AY3,000、BY2,500
お問い合わせ TEL 06(341)4506

■東京公演

2月23日(火) 厚生年金会館大ホール 6:30pm

2月24日(水) 厚生年金会館大ホール 6:30pm

2月25日(木) サンプラザホール 6:30pm

SY3,900、AY3,000、BY2,500
お問い合わせ TEL 03(402)7281

4月11日(日) 京都会館第1ホール 7:00pm 4月14日(水) 名古屋市公会堂 6:30pm

お問い合わせ TEL 075(211)0261

お問い合わせ TEL 052(241)8111

4月13日(火) 大阪府立体育館 6:30pm

お問い合わせ TEL 06(341)4506

4月16日(金) 武道館大ホール 6:30pm

お問い合わせ TEL 03(402)7281

PRETENDERS

ULTRAVOX

JOURNEY
ジャーニー来日決定!!

ROCK 'N' ROLL IS



ROCKUPATION
'82SPECIAL
(土)2:00~2:30

DJ: 大森庸雄



オール・ジャパン・ポップ20
(日)7:00~7:30

ポップス・ホット・ライン
(日)20:00~21:00



ミス・DJ
リクエスト・パレード
(月~金)0:30~3:00

文化放送
JOQR 1134 KHz



SG
バイオグラフイ。

IS



ヤパン・ポップ20

ホット・ライン

0

文化放送

JOQR 1134 KHz



SG
バイオグラフイ。

SGのルーツは、1966年に発表されたヤマハ初のエレクトリックギターにさかのぼることができる。そしてSG-2000の原型をさぐるうえで忘れられないのが、1974年発表のプロモデルSG-175とこれに続く175カスタムである。そう、銘器コレクターのノドをゴク引とせずにはおかないあのSGたちだ。たとえばブッダ・インレイが施されたカルロス・サンタナのナチュラル・フィニッシュのSGも、175カスタムのうちの1本だ。さらに彼の細部にわたる勘言もとり入れながら、幾度となく試作がくり返された結果、1976年、ヤマハ初のエレクトリックギターから10年後、ユニークなラミネート構成を施したワンピース構造ボディ、グランドピアノから学んだブラズ製サステインプレート、さらに新開発の高性能オープンハンバッキングG-1マイクを得て、ひときり分厚くブライต์なうぶ声とともに、SG-2000はシーンのメインストリートに躍り出た。その実力は内外のトップアーティストがしめしてくれている。そのノウハウは弟分にしてライバルにまで成長したSFをはじめ、他の兄弟たちへフィードバックされている。トラッド・ザ・SG。

YAMAHA Electric Guitar SG-2000

¥199,000 マイクハンバッキングG-1×2 コントローラーボリューム×2 トーン×2 3.0Ωスイッチ 1部メカパーツ
ニューオープンアップルキャビネット 高級メカパーツ 最新ワンピース構造 包ムースコート仕上げ 重量4.2kg
SG-1000 ¥109,000 / SG-800 ¥99,000 / SG-600 ¥69,000 各2カラーバリエーション

YAMAHA

燃えてくれだけ。



燃えてロック魂

“スピリット”

したたかなロック魂を内に秘めて
君のプレイをサポートする。
ラウドなパワー感で
君の愛機をドライブさせる
ローランドのギター・アンプ「スピリット」。
10Wのスピリット10に、ペーアンまで加わって6種類。
シンプルでストレートなサウンドが、
君のハートにジャスト・フィット。

OUTPUT AMPLIFIER SPIRIT-50 OUTPUT AMPLIFIER SPIRIT-30 OUTPUT AMPLIFIER SPIRIT-20
W/100W W/30W W/20W

新たな「スピリット」をロックする君へ



日本総代理店
山野楽器 海外事業部

東京都千代田区千代田 1-10-10 TEL: 03-5461-7011
東京都中央区銀座 1-10-10 TEL: 03-5561-1111
東京都港区新橋 3-10-10 TEL: 03-5561-1111
東京都中央区銀座 1-10-10 TEL: 03-5561-1111

Epic

米日記念最新シングル
絶対発売中
ティス・スイス・レディオ・クラッシュ



THIS IS RADIO CLASH
演奏を使って、世界に響かせるか、か
聴覚の演奏を使って、
この世界に響かせるか、か
海賊放送、みんな、しっかり聴いてくれなさい

(最新アルバムは4月発売予定)

★ T H
E
EPIC/SONY INC.



MC924

さらに、鍛えこんでみた。戦闘力が満ちてきた。

ベースサウンドの質と、ベースのプレイabilityを徹底的にチューズした結果、ヘヴィでうねるようなヴァイブレーションと、若干軽めて、より絶妙なボディバランスが実現しました。これが新しいMCのプロフィールです。サウンド・クリエーションは、±15dBのワイドレンジ3BandEQと、新開発のピックアップ・バランスが完璧にフォロー、プレイabilityの完璧さは、今夜のステージでこらえただけです。運悪くこの素晴らしいステージ・アクトに遭遇出来ない方には、一度手にしてみてください(かなり値がありません)

ニュー・アヴェイラブル・フィニッシュ、ホーラー・ホワイトがステージにアートを加えます。ニューMC、鍛えこまれてアンコールに応える。

Ibanez

カワサキ楽器株式会社(株) 伊勢崎工場 伊勢崎市 伊勢崎工場
〒370-0191 伊勢崎市東町2-22 電話(027) 541-1111

Heavy Vibration VS. Easy Action



Epic
 来日記念最新シングル
 ティス・イス・レディオ・クラッシュ
 絶賛発売中



THIS IS RADIO CLASH
 弾奏を伴って、世界に聴いてもらえぬだろうか。
 聴覚の弾奏も使って、
 この世界に聴かされるだろうか。
 海賊放送——みんなしつかり聴いてくれなさい

(最新アルバムは4月発売予定)

夢なら、醒めるな。



ザ・クラッシュ

★ THE CLASH ★
 PRESENTED BY EPIC/SONY INC.



白い暴動
 White Riot
 1977年11月発売
 本作は、ザ・クラッシュのデビューアルバム。全米1位、全英1位のヒットを記録した。収録曲は、本作の代表曲「White Riot」をはじめ、「Tommy Stinson」、「I Wanna Be a Star」、「Rudie」など、全米1位のヒット曲が数多く収録されている。



THE CLASH
 1977年11月発売
 本作は、ザ・クラッシュのデビューアルバム。全米1位、全英1位のヒットを記録した。収録曲は、本作の代表曲「White Riot」をはじめ、「Tommy Stinson」、「I Wanna Be a Star」、「Rudie」など、全米1位のヒット曲が数多く収録されている。



ロンドン・リング
 London Calling
 1979年11月発売
 本作は、ザ・クラッシュの2ndアルバム。全米1位、全英1位のヒットを記録した。収録曲は、本作の代表曲「London Calling」をはじめ、「I Wanna Be a Star」、「Rudie」など、全米1位のヒット曲が数多く収録されている。



サンティニスタ
 Sandinista!
 1980年11月発売
 本作は、ザ・クラッシュの3rdアルバム。全米1位、全英1位のヒットを記録した。収録曲は、本作の代表曲「Sandinista」をはじめ、「I Wanna Be a Star」、「Rudie」など、全米1位のヒット曲が数多く収録されている。



**AN UDO ARTISTS, INC.
PRESENTATION 1982
ROCKUPATION '82**

AN UDO ARTISTS, INC. PRESENTATION 1982
ROCKYOUNTON '82 第2弾

THE CLASH

日本公演

1月24日 東京 渋谷公会堂

主催 ■ 文化放送 / ウドー音楽事務所

1月25日 大阪 フェスティバルホール

主催 ■ ラジオ大阪

1月27日 東京 サンブラザホール

主催 ■ 文化放送 / ウドー音楽事務所

1月28日 東京 サンブラザホール

主催 ■ 文化放送 / ウドー音楽事務所

1月29日 東京 サンブラザホール

主催 ■ 文化放送 / ウドー音楽事務所

1月30日 東京 厚生年金会館大ホール(昼の部)

主催 ■ 文化放送 / ウドー音楽事務所

1月30日 東京 厚生年金会館大ホール(夜の部)

主催 ■ 文化放送 / ウドー音楽事務所

2月1日 東京 サンブラザホール

主催 ■ 文化放送 / ウドー音楽事務所

2月2日 大阪 フェスティバルホール

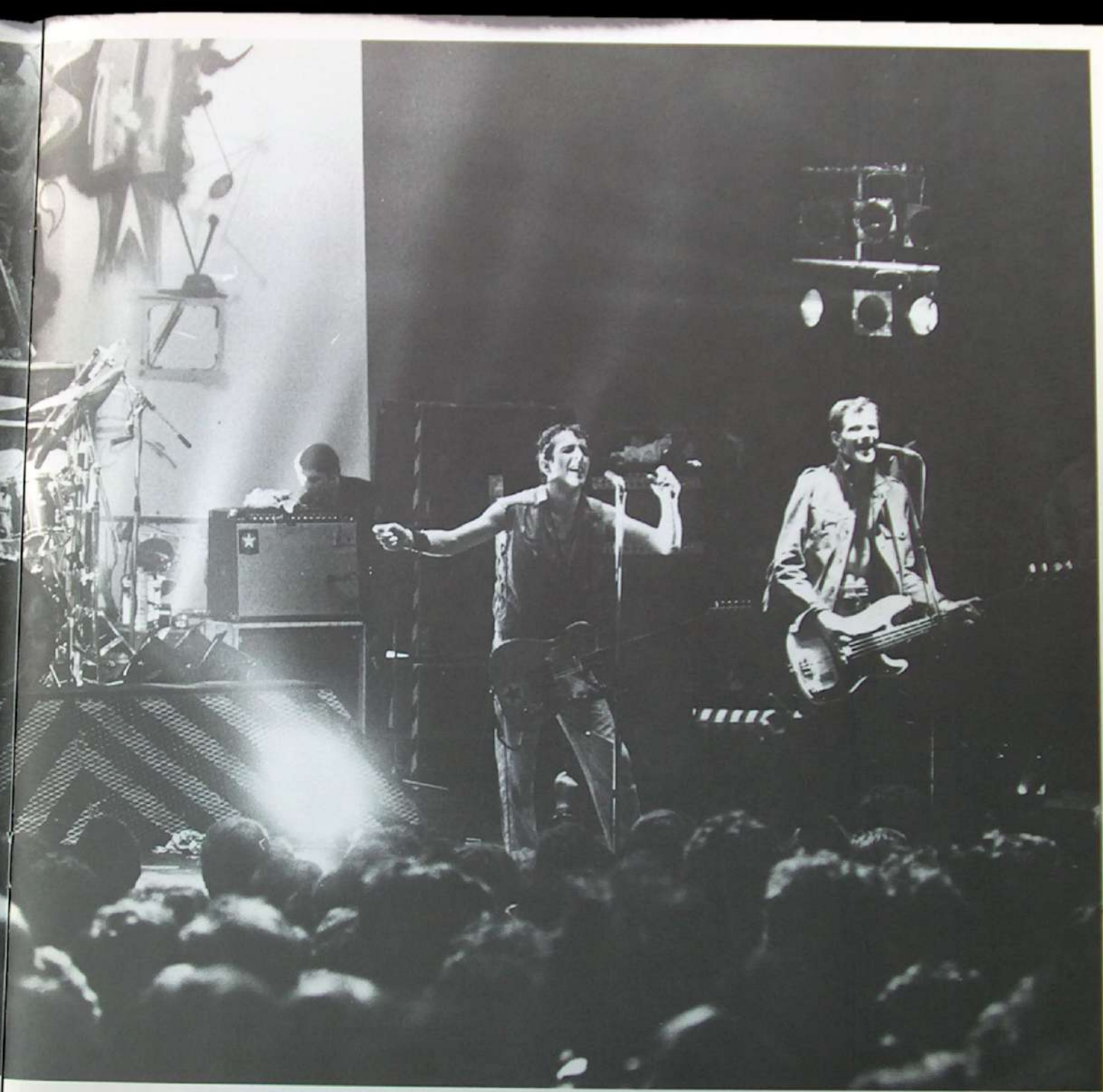
主催 ■ ラジオ大阪

招聘 ■ ウドー音楽事務所

協力 ■ EPIC・ソニー

協賛 ■ プリヂェストンタイヤ株式会社



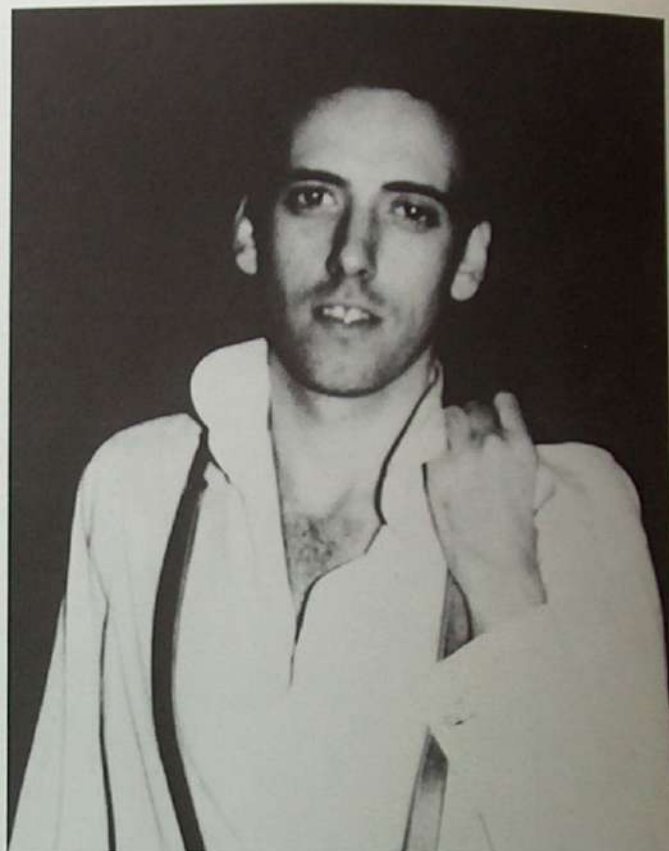


PAUL SIMONON



ポール・シムノン(B,Vo)

MICK JONES



ミック・ジョーンズ(G,Vo)

Photo by BOBEE PERSSON

JOE STRUM



ジョー・ストラマー

MICK JONES

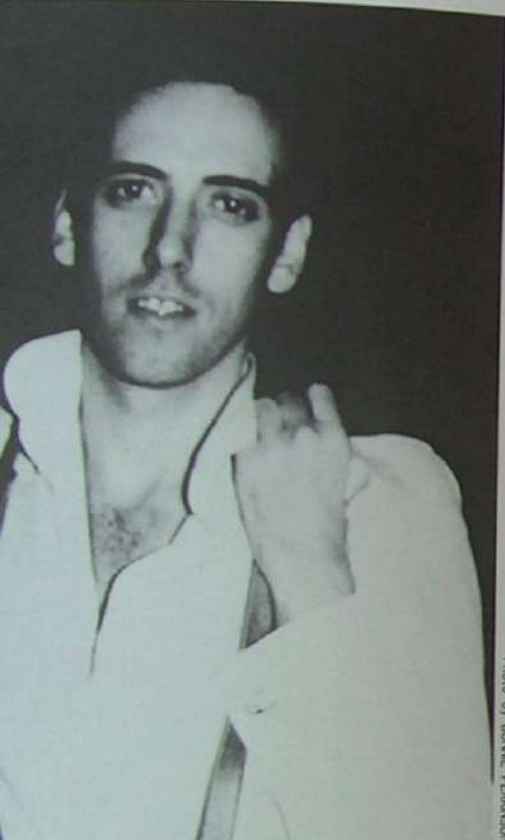


Photo by BONNE PERINSON

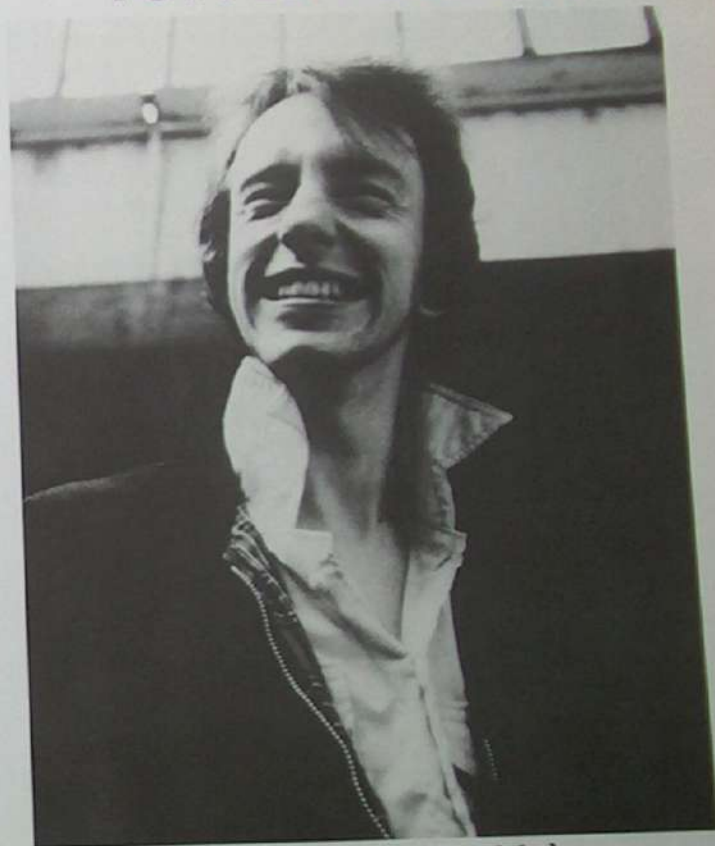
ミック・ジョーンズ(G,Vo)

JOE STRUMMER



ジョー・ストラマー(Vo,G)

TOPPER HEADON



トパー・ヒードン(Ds,Vo)

ロンドンが生んだ衝撃のロッカーズ、クラッシュは、1975年3月に結成をみたミック・ジョーンズ、ポール・シムノン、トバー・ヒードンのそれぞれが相次いで在籍したバンド“ロンドンSS”を基盤として誕生した。

76年1月に“ロンドンSS”解散後、意気投合したミックとポールは、後にパブリック・イメージ・リミテッドに参加するキース・レヴィン、そしてテリー・キムズと共に3月に新バンドを結成、“ザ・クラッシュ”と名乗る。そして翌月には、74年から在籍していた“101ers”を脱退したジョー・ストラマーが加入して、8月に正式デビューを果たし、イスリントンのスクリーン・オン・ザ・グリーンでステージ・デビューを飾った。

9月にキース・レヴィンが脱退して再び4人編成となった彼等だったが、11月にポリドールとCBSによる争奪戦の末、CBSと契約。セックス・ピストルズを旗頭とするパンクという名の一大勢力の中で、77年3月にデビュー・シングル「白い暴動」を発表する。続いて4月に発表された同名のデビュー・アルバムは、全英アルバム・チャート初登場にして12位にランクされ、「サウンズ」「メロディ・メイカー」「NME」各紙の表紙に登場する一方で、本国のみならずクラッシュの名はロック・シーンに殴り込んだロンドン・パンク・ムーヴメントの中核的存在として海を越えた。

5月にテリー・キムズの後を受けてトバー・ヒードンが参加、現在のラインアップが整ったところで、メインで初のイギリス・ツアー、題して“ホワイト・ライオット・77ツアー”を行なう。

その後、警察のやっかいになることしばしばで、ジャーナリズムから手さびしい攻撃を受けるが、何ら聞せず、さらにおおまかまる彼等は逆にロンドン・キッズのヒーローとしてもはやされる。

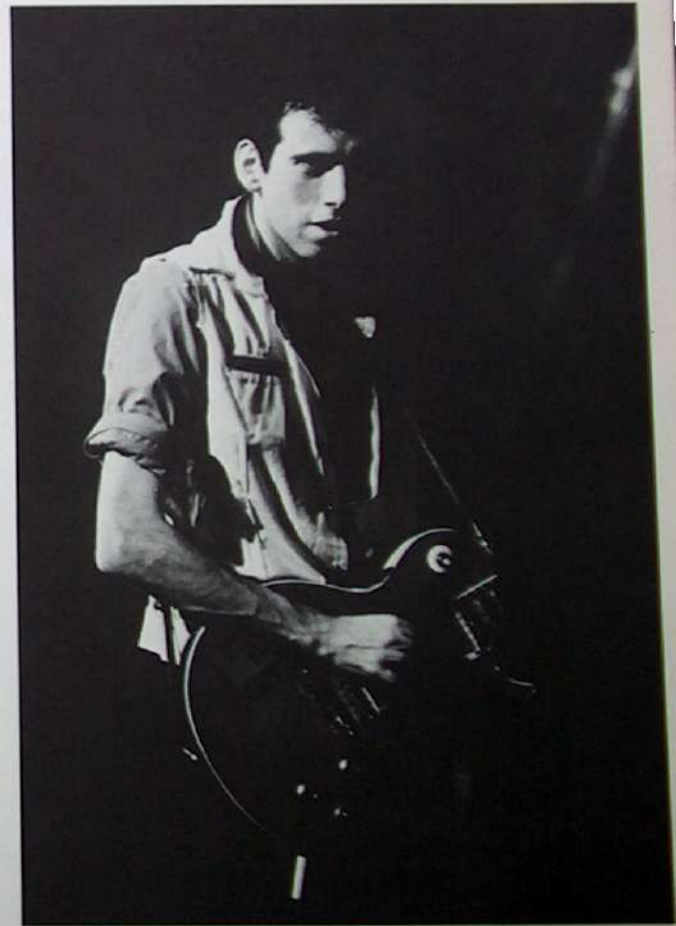
78年4月には“人種差別反対コンサート”に参加。この模様は11月に完成したジャック・ヘイザン監督によるクラッシュの映画“RUDEBOY”に収められた。11月17日にはサンディ・パールマンのプロデュースによるセカンド・アルバム「動乱」を発表。チャート初登場2位をマークしたこの新作を手にして79年早々から“第2次真珠湾ツアー”と銘うった初のアメリカン・ツアーを行なった。そして、2月に発表されたサウンズ紙の人気投票で、アルバム、グループ、ライブ部門においてすべてNo.1に輝き、本国における支持の高さをそこに実証する。

この年の精力的なアメリカ攻勢は、暮にガイ・スティーヴンスをプロデュースに迎えた3作目「ロンドン・コーリング」の全米チャート・インで見事に実を結び、80年4月の3度目の全米ツアーも大成功。直後にとり組んだ3枚組という超大作「サンディニスタ」は12月にリリースされ、まったくの新生面を披露して激動するシーンを生き抜く数少ないパンク・ロッカーの心意気を見せつけた。

そして今、幾度となくのぼった来日のウワサを遂に実現させ、その鋭い感性を、あふれる情熱を、エネルギー丸となって直に伝えてくれるのだ。



THE CLASH







THE CLASH